

2024 年度イラン短期研修プログラム 報告書

東京大学教養学部 3 年 阿部想

1. はじめに

2024 年 2 月 12 日から同月 23 日までの 12 日間、公益財団法人笹川平和財団が主催するイラン短期研修プログラムが行われた。私は個人的な事情により、やむを得ず 2 月 17 日から 23 日までの 7 日間のみ参加した。したがって、カタール・テヘランにおける大半のプログラムは不参加となり、主にエスファハーン・カーシャーンを見学して回った。

唯一参加することができたテヘランでの 1 日は、外務次官の表敬訪問に始まり、続いて経済協力機構、イラン外務省を訪問した。午後はイラン国立博物館を見学した後、ホテル付近を散策した。さらに翌日、ゴレスタン宮殿を訪れた後、昼食をとってエスファハーンへ出発した。

エスファハーンでは、イマーム広場とその周辺の施設を訪れ、サファヴィー朝時代のイランの文化や建築に触れるとともに、エスファハーン最古の 8 世紀に創建されたジャーメ・モスクを訪れたり、スーフイズムの高まりの中で建てられた、揺れるミナレットのメナール・ジョンバーンを見学したり、アルメニア正教会でイランにおけるアルメニア人の歴史を伺ったりと、イランの多様な歴史と文化を学んだ。

最後に 1 日滞在したカーシャーンでは、ボルヘルディ歴史的家屋やフィン庭園、古代遺跡テペ・シアルクに加え、カーシャーン・メフル身体障害者支援センターを訪れた。

2. 永遠の憧れ・エスファハーン

初めてイランに行きたいと思ったのは高校生の時だった。サファヴィー朝の繁栄を表す「イスファハーンは世界の半分」という言葉とともに教科書に掲載されていたイマーム広場の写真。私はその精巧な青に目を奪われ、以来いつかエスファハーンを訪れたいと憧れ続けてきた。そんな長年の願いが今回の訪問で叶ったのである。

イマーム広場のシンボリック的存在であるイマーム・モスクは圧巻の佇まいだった。緑がかかった青色のミナレットは、2 本はメッカの方向、2 本は広場の方向を向いて空高くそびえ立っており、快晴の空に映える。1 番大きなドームの真下に辿り着いた私たちに向けて、ツアーガイドの方がクルアーンの一部の暗誦を披露してくれた。時が止まったかのような静けさを破り、ドーム全体に朗々と響き渡る歌声のような美しい声に、私は感動で身震いした。

イマーム広場は、南側のイマーム・モスク、東側のシェイク・ロトフォッラー・モスク、西側のアリ・カブ宮殿に囲まれるようにして広がっている。実際に訪れてみて最も気に入ったのはこの広場の部分だった。広場は美しく整備されていて、真ん中の大きな噴水を取り囲むようにして可憐な花畑と青々とした芝生が広がり、地元の子もたちがサッカーをしたり、大人たちが座っておしゃべりしたりしている。なんとも長閑で平和なこの空間に、私は一瞬で魅了された。

広場の西に佇むアリ・カブ宮殿のテラス部分から眺める広場の様子もまた圧巻だった。右手には壮大なイマーム・モスク。真下をみるとゆったりと過ごす地元の人々で賑わう広場が見え、その奥にはシェイク・ロトフォッラー・モスクが見える。豪華絢爛ながらも上品さのある青のモスクと、眼下に広がる青々とした芝生と花々、行き交う人々の姿に、かつて「エスファハーンは世界の半分」と評した誰かの言葉がこれほどにも説得力をもつ瞬間はないだろうなどと考えながら、私はうっとりとして広場に見入った。

3. レジスタンスの国

イラン渡航前、私にとってイランは「反西洋」の国であるというイメージが非常に強かった。イランは1979年のイラン革命を契機に、それまでのアメリカ文化の模倣を否定し、反米的な外交スタンスや反欧米的な文化政策を採用したことで知られる。これは、ある種の西洋中心主義に抗う姿勢と捉えられる。西洋中心的な知・文化・価値観の体系にどのように抗い得るのかという問いをイランの文脈から学びたいというのが、本プログラムに参加した動機の一つであった。

しかし、実際にイランを訪れてみると、人々の暮らしは私が想像していたものとは大きく異なっていた。私がとりわけ反西洋的な政策の象徴と考えていた「西洋音楽の禁止」はもはや過去のものであり、人々はさまざまなジャンルの音楽を楽しんでいた。イランの若者の間では欧米のポップミュージックが広く聴かれており、近年ではK-POPも人気を博しているという。

西洋中心主義に抗う国としてのイランを期待していた私にとって、この現実は一歩引けるものであったが、同時にイランを別の視点から捉える契機ともなった。それは、「レジスタンスの国」としてのイランである。イランの人々の生き方は、常に抑圧への抵抗として表出していると私は感じる。たとえば、イラン・イスラーム革命期には、それが欧米的な価値観に対抗するムスリムとしてのアイデンティティの表出であった。しかし、現在ではむしろ、西洋的な文化を過度に制限しようとするイラン政府に対する抵抗の形として現れているように思われる。

イラン・イスラーム共和国の、もう一つの特徴的な文化政策として、女性のヒジャブ着用義務がある。しかし、現地を訪れて気づいたのは、ヒジャブを緩く巻いたり、全く身につけていなかったりする女性が少なくないということであった。聞けば、4年前にヒジャブの着用をめぐって1人の女性が逮捕され亡くなった事件をきっかけに始まった「女性・生命・自由」運動の影響で、ヒジャブをつけない女性がここ数年で急激に増加したとのことだ。ヒジャブの着用をめぐる人々の実践もまた、イランにおけるイラン政府への「レジスタンス」の一環と捉えることができるだろう。

4. カーシャーンの障害者施設にて

私は大学においてケアや福祉に関心を持ち、知的障害・発達障害の中高生向けの障害者施設でフィールドワークを行うことで、文化人類学の立場から障害者福祉や生きづらさについて考えてきた。そのため、カーシャーン・メフル身体障害者支援センターの視察は非常に刺激的で勉強になった。

この施設は、大体12歳から40歳くらいまでの身体障害者の方々を対象に、リハビリを行ったり、職

業訓練を行ったりするための施設である。職業訓練の内容は多岐に渡り、ミナーカーリーと呼ばれるイランの伝統工芸品を作る人々もいれば、医療用の使い捨て衣類を作る人々、自由に絵画を創作する人々もいた。ここで訓練を終えた人は、自分で独立して製作を行うこともできるし、施設に残って施設内で製作を続けていくこともできる。障害者の方々が作る作品はどれも美しい上、バザールなどでは見かけない色を用いるなど独自性もあり、私たちは気に入った作品をいくつか購入した。この売り上げは全額製作者の方の収入となるという。

この施設の驚くべき点は、一切の運営を一般の寄付金によって賄っているということだ。この施設は日本で言う NPO 的存在なのだが、政府からの補助金などは一切貰わず、一般の人々からの寄付のみで財政を維持しているとのことだった。この事実には、一般の人々の福祉への関心の高さと、イスラーム教に根付く寄付文化の強さを私は実感した。一方、経済制裁や物価高騰によるイラン経済の混迷が人々の寄付文化に与える影響も大きく、寄付が年々減少していることも伺った。以前よりも施設の財政状況は苦しくなっているという。実際、施設の 7 階建ての建物は、資金繰りの問題から未だに工事半ばで放置されており、外から見ると窓がついていない部分がほとんどだった。現在はかろうじて施設の運営には支障がないとのことだったが、今後も活動を維持することができるのか不安が残る。

この施設を訪問する中で、イラン社会における障害者の置かれた状況についても考えずにはいられなかった。先述の通り、この施設には主に 12 歳以上の人々が通っている。高校までの教育が憲法によって無償で保障されているイランにおいて、身体障害のある子どもたちが 10 代前半から職業訓練施設に通い始めるという現状は、障害者が学校教育の中で周縁化されていることを示していると推測できる。

さらに、この施設に通っていない多くの障害者の生活についても考えさせられた。施設のスタッフによれば、この施設に通う障害者の方々は、施設を通じて他の人とつながり、楽しい時間を過ごす機会を得られるという。一方で、多くの障害者は何もすることなく家で時間を過ごすことが多いそうだ。つまり、施設を利用できない障害者は行き場がなく、家にいるしかないというのが現実だ。人口 30 万人のカーシャーンにおいて、カーシャーン・メフル身体障害者支援センターが唯一の障害者就労施設であることを考えると、大多数の障害者は施設を利用せず、ほとんどの時間を家で過ごしていると推測される。彼らは毎日どのような思いでどのようにして時間を過ごしているのだろうと思いを馳せずにはいられなかった。

5. おわりに

1 週間という短い期間ではあったが、私にとって今回のイラン滞在は、中東の多面性と奥深さを知る貴重な契機となった。私自身は過去に幾度か湾岸諸国を訪れていたこともあり、中東というとアラブのイメージが強く、イスラーム教の国々として単一的に捉えてしまっていた。しかし、今回のイラン訪問を通じてイランの人々や文化遺産と直接触れ合うことで、イランのイスラーム化以前からの文化の連続性やイスラーム化以後の文化の独自性、民族や言語、宗教の多様性を肌で感じ、中東の広がりとお行きを捉えられるようになったと感じている。さらに、これまで私は先進国以外の障害者福祉に触れることがなかったため、今回のカーシャーンにおける障害者施設の訪問は、日本の福祉を比較の視点から捉える良い契機となった。今後はぜひこの学びを活かして、中東地域における障害者をはじめとする周縁化された人々に着目しつつ、中東の広がりとお行きをより精緻に捉えられるよう邁進していきたい。

末筆ながら、このたび本プログラムに参加する機会を得られましたのは、木村様をはじめとする笹川平和財団の皆様、現地コーディネーターの穴田様、SIRの皆様を含む多くの方々の多大なるご尽力の賜物でございます。心より感謝申し上げます。また、途中参加にもかかわらず温かく迎え入れてくださった他のメンバーの皆様にも、深く御礼申し上げます。この場をお借りし、本プログラムに関わってくださったすべての方々に、心より感謝の意を表します。

(なお、本所感は執筆者個人のものであり、笹川平和財団の見解を示すものではありません)